



【豚編】

豚は、汗をかいて体温調節ができないうえ厚い皮下脂肪で覆われているため、暑さがとても苦手です。夏場はどうしても暑熱ストレスにより飼料摂取量が減少し、生産性が落ちてしまいます。

飼料摂取量の減少により、妊娠豚では産子数や子豚の出生時体重の減少、分娩後の母豚では、泌乳量低下により子豚の離乳時体重の減少などが認められます。肥育豚では、増体が落ち、出荷日齢が遅れます。

暑熱対策は、毎年同じように繰り返すだけでなく、豚の様子を見て見直すことも大切です。暑熱ストレスの感じ方には個体差があります。例えばストールでのダクト送風は、風が当たるのを嫌がる豚に対しては後ろに下がって風から逃げられるように後ろから前に向かって送風するなど工夫が必要です。ダクトの位置や送風の角度、首元へのドロップの滴下時間や滴下速度は適正かどうかを確認しましょう。ドロップの水量が多いと床が濡れて腹が冷え、流産につながることもあります。また、飲水量を増やすため（体の中から冷やすため）に、吸水器は豚が楽な姿勢で簡単に飲める位置に調整しましょう。少しでも多くの豚に「快適だなあ」と感じさせ、夏場を乗り切りましょう。

（田中）



【鶏編】

全身を羽毛で覆われ汗をかくことができない鶏にとって、暑さは生産性や生命維持に重大な影響を及ぼします。

本格的に暑くなる前に鶏舎環境と設備の整備をしておくことが重要です。今のうちに飲水機器、換気ファン等の確認を行い、発酵熱や多湿のもととなる鶏糞を取り除いておくようにしましょう。

飼養衛生管理基準では防鳥ネットの設置が定められていますが、十分な換気のため埃やクモの巣はこまめに除去するよう心がけましょう。また、同基準には「衛生管理区域内の整理整頓」や「家きん舎等施設の清掃」の項目がありますが、周辺の草刈り・枝払い、不要物品の片づけを行うことで野生動物の隠れ場所を無くすとともに消毒が行いやすくなります。同時に風の通り道を確保することにもつながりますので、暑熱対策としてもぜひ実施してください。

気温が 27℃を超えてくると飼料摂取量が低下し、産卵率や卵重の低下につながります。さらに 35℃を超えると開口呼吸（パンティング）やあえぎ呼吸、翼の開垂がみられます。特にパンティングが増えると血液がアルカリ性に傾き、増体、産卵性、免疫機能の低下を引き起こします。これを防ぐために重曹を水や飼料に添加（0.5～0.7%）して与えることが有効です。

（川副）

